

2002年—ユーロの導入 シリングからユーロへ

ノムラ・インターナショナルP L C 茶野 道夫

2002年の元旦は、小澤征爾の指揮するニューイヤー・コンサートで明けた。初めて日本人が指揮した為、このコンサートのCDは日本で爆発的に売れたと記憶している。またこの日はユーロ紙幣や硬貨が流通を開始した日でもあった。マエストロ小澤もコンサートの途中『今日の謝礼はユーロでもらえますね』とさりげなく、新しい貨幣の導入を世界にアピールした。

『同じ所にいながら、外国へ行ったように感じ』——。これが、ユーロが使われ始めた当時の私の感想である。言葉、場所、周りの人、それから日頃使っているお金。これらは普段は気がつかないが日常生活の基本になっている。これらが全て変わる時に人は、外国に来たなという感じになる。しかし全てが変わらなくても、少なくともどれか一つが変わると同じような気分になるものだ。

例えば東京で日本人が一人もいないパーティーに参加すると、誰でも外国にいる様な感じになる。お金も同じである。自分の財布から使い慣れたシリングが消え、お釣りをもらうたびにドンドン新しいお金、ユーロへと変わっていく。そのたびに頭の中で $1 \text{ ユーロ} = 13.76 \text{ シリング}$ で換算する——。同じ所に居ながら、外国に来た感じがした。

オーストリアではユーロへの切り替えはスムーズにすすんだ。元旦の休み明けから2日後には、シリングはほとんど流通しなくなった。また一部の国のように物価が目立って上がる事もなかった。

オーストリアは小国である。ザルツブルクやインスブルックなどはむしろドイツのミュンヘンの郊外にあるとあってよい。ユーロが導入されるまでは、これらの町の人々はドイツに買い物に行く度に、シリングをマルクへ交換しなくてはならなかった。シリングとマルクはかなり前から7対1の比率で為替が固定されていたにもかかわらず、銀行はしっかり両替手数料を取った。そのうちにシリングの高額紙幣を少額紙幣に換えても手数料を取るところが出るぞと思っていたら本当にそういうことが議論され始めた。したがってユーロの導入は庶民の生活に大きなメリットを与えた。

メリットを受けたのは庶民だけではなかった。オーストリア政府はユーロが導入されるまでは国内で発行されるシリング建ての国債と、外国投資家向けの外貨建て国債を発行していた。シリング通貨時代に政府は一度内外の国債を統一し、シリング建てでグローバルな国債を発行しようとしたことがあった。しかしマイナーな通貨、シリングに見向きをする外国投資家はほとんどおらず、試みは失敗した。

ユーロが導入された現在、格付けの高いオーストリアの国債はアジアの投資家を含めて多くの投資家に大人気である。こうした事を背景に、ユーロの債券市場での地位は上がり、2006年の統計によると、国際金融市場における債券発行残高におけるユーロ建てのシェアは47.3%で、2位のドル建ての36.4%をはるかに上回っている。

今はオーストリアからドイツに入国しても、別の国へ来たと感じない。パスポート・コントロールも税関も無ければ言葉も同じ、通貨も同じ——。前に述べたように『外国に居る』という感覚になる前提を十分に満たしていない為である。『欧州は一步一步、統合への道を歩んでいる』